

2013年度 学校教育高度化センター主催シンポジウム  
社会に生きる学力形成をめざしたカリキュラム・イノベーション  
—新たなカリキュラム像の提案に向けて

## 社会参加の学習ユニットからの提案 —シティズンシップ(市民性)教育の視点から—

2013.12. 8. 小玉重夫  
(東京大学・教育学)

## 本報告の構成

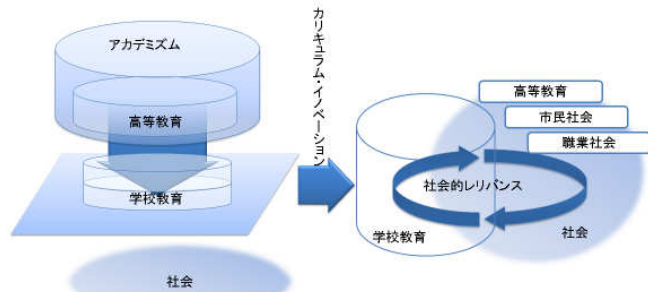
- \* 1 イノベーション科研の全体構造と、本ユニットの位置づけ
- \* 2 シティズンシップ教育の二つの特徴:アマチュアリズムと政治参加
- \* 3 カリキュラムの提案へ向けて

## 1 イノベーション科研の全体構造と、 本ユニットの位置づけ

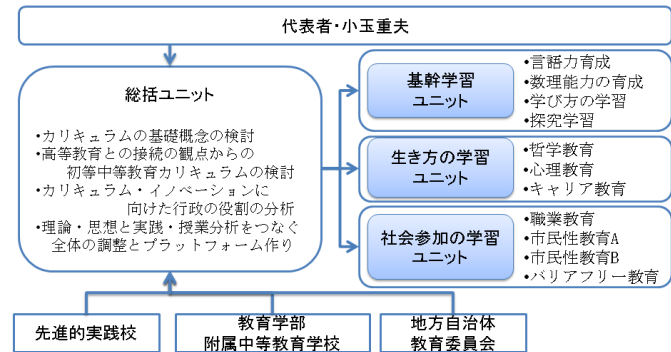
## 研究の理念

- \* 1 アカデミズムを起点としたカリキュラム編成から、社会的レリバンスを起点としたカリキュラム編成への転換をはかる。
- \* 2 カリキュラムの市民化をめざす。
- \* 3 事前規制(内容規制)を中心としたカリキュラムのガバナンスを、事後規制(アカウンタビリティ)に重きをおいたカリキュラムのガバナンスへの転換をはかる。  
(小玉『学力幻想』(後掲)206-207頁)

## 研究の概念図



## 研究の組織



## 社会参加の学習ユニット

- \* (1) 市民性教育プロジェクトA(川本隆史、小玉重夫、片山勝茂、金森修)
  - \* (2) 市民性教育プロジェクトB(牧野篤)
  - \* (3) バリアフリー教育プロジェクト(白石さや、星加良司)
  - \* (4) 職業教育プロジェクト(本田由紀)
- \* 詳細は、小玉重夫・牧野篤・星加良司・本田由紀「学校教育高度化センター関連事業(イノベーション・イノベーション)社会参加の学習ユニットにおける本年度の活動」『学校教育高度化センター年報2012』、2013年3月を参照(後掲、東大の機関レポジトリを通じ、ウェブ上からもダウンロード可能)

### 社会参加の学習ユニットにおける本年度の活動

報告者 小玉 重夫 (センター長・教育学研究科 教授)

#### 1. 社会参加の学習ユニットの役割

本ユニットでは、社会を市民的・公共の世界と職業的世界に分類してとらえ、前者の市民的・公共的世界については、多文化共生と市民性(シチズンシップ)を課題とした新しい学習分野の整理に対応するカリキュラムの条件を、市民性教育に関する二つのプロジェクト(学校教育の内部から迫るAと、外部から迫るB)と、バリアフリー教育プロジェクトによって明らかにすることをめざす。後者の職業的世界については、職業的レリバンズを有するカリキュラムの条件を、職業教育プロジェクトによって明らかにすることをめざす。

以下では、それぞれのプロジェクトの担当者が、進捗状況を報告する。(小玉重夫)

#### 2. 各プロジェクトの進捗状況

##### (1) 市民性教育プロジェクトA (川本隆史、小玉重夫、片山勝茂、金森修)

本プロジェクトでは、市民性(シチズンシップ)教育を学校のカリキュラムに導入する可能性とその条件を、理論・思想と実践の両面から検討することをめざしている。後者の実践については、日本における先進的実践校と自治体の協働成果をふまえて、附属中等教育学校と協働して、シチズンシップ教育のカリキュラム開発を行うことをめざしている。

本年度は、昨年度に引き続き、欧米のシチズンシップ教育の思想傾向を公共性の観点から整理する作業を行った。あわせて、日本における政治的リテラシー教育の可能性を、お茶の水女子大学附属小学校や、総務省での研究会の議論をふまえて

て探った。

また、附属中等教育学校の教員と協働で「シチズンシップ教育のカリキュラム開発」の研究グループを昨年度から組織した。このグループには、「哲学教育プロジェクト」からも一部メンバーが合流して、活動を行った。本年度は、昨年度の研究会と予備的議論の成果をふまえて、各教科で授業実践を体系的に行い、その検討をした。具体的には、理科、社会科、国語、道徳の各教科において、政治的リテラシーの申請をなす「争点を知る」に焦点をあてた授業や、隠された政治を顕在化させることで批判的思考力を養う授業が行われた。次年度は、これまでの実践を共有しつつ、引き続き実践を行い、また、シチズンシップ教育についてのカリキュラムモデルも提案し、これらをまとめて、本グループとして報告書を作成することを予定している。(小玉重夫)

##### (2) 市民性教育プロジェクトB (牧野篤)

市民性教育Bは、昨年度に引き続き、子ども・青年が他者との承認関係の中で自己認識を深め、社会参加へと至る軌道を探っている。具体的な対象は、昨年度と同じく、a. 柏市の多世代交流型コミュニティの実践、b. 飯田市の集落レベルの社会教育活動、c. ものづくりプロジェクト「ものづくり」APANである。今年度は、これらの実践を相互にネットワーク化する取り組みを行った。たとえば、a. と c. を結びつけた「東大キッズセミナー」では、コミュニティカフェをベースにした、インプロとマジック・セミナーをとおしたおとなたちとの交流を、さらに「ものづくり」APANとのジョイントでは、道具をテーマにデザインからモデル

ングまでを行い、彼らが自分の思いを形にしながら、それを地域社会との交流へと運んでいく動きを追った。ここでは、学びの過剰性を減らすのが、他者としてもたらされる利他性と近接性であることがとらえられた。(牧野 篤)

事後調査において、意識・知識の両面で、事前調査と比較して顕著な向上が観察された。なお、2012年度末には第1回の実験授業から1年を経過した時点で同じ調査を実施し、授業の効果の持続性を把握する。(本田由紀)

### (3) バリアフリー教育プロジェクト(白石さや、星加良可)

本プロジェクトでは、様々なマイノリティを包摂した共生社会を生きる力を涵養する学習を中等教育のカリキュラムに効果的に導入することを目的として、汎用性の高い参加型学習プログラムの開発研究を実施している。今年度は、昨年度の試行的実践から得られた知見を踏まえ、附属中等教育学校の教諭を実施者として2種類の参加型モジュールから成る授業実践を行った。その結果、事前・事後の質問紙調査により不平等の認知や認知の状況向來への感受性に一定の上昇が見られたほか、自由記述のふりかえりにおいても、外見による先入観への反省的思考、自分が見えていない世界への気づき、障害(者)観の変化等が顕著に示されるなど、プログラムの狙いを超えてポジティブな効果が一定程度確認された。それを受け、プログラムのバージョンアップを図りつつ教材化(指導マニュアルの作成を含む)を賞賞進めている。(星加良可)

### (4) 職業教育プロジェクト(本田由紀)

「教育の職業的意義」グループでは、「仕事のリアル」と題して、昨年度の3月に続き今年度もおいても7月2日に金融教育、同日に労働法教育の授業を、それぞれの専門家に担当していただく形でいずれも2時間続きの形で実施した。3月と同様の内容で事前・事後調査を実施し、両調査結果の比較を通じて授業を受けたことによる意識と知識の変化を把握した。3月と7月の実験授業における調査結果の一部は9月26日に開催されたシンポジウムで発表した。いずれの授業についても、

## 2 シティズンシップ教育の二つの特徴：アマチュアリズムと政治参加

## シティズンシップ(市民性)とは何か

- **シティズンシップとは、ある一つの政治体制を構成する構成員(メンバー)、あるいは構成員であること(メンバーシップ)を指す概念である。日本語では公民性(公民的資質)、市民性(市民的資質)などと訳されることが多い。**
- **市民(シティズン)という概念の由来は、古典古代のギリシアにまでさかのぼる。古代ギリシアでは、アテネなどの都市国家(ポリス)で直接民主主義の政治が行われていた。そこでの市民とは、直接民主主義の政治に参加するポリスの構成員をさす概念だった。そこには、単なる都市の住民という意味にとどまらず、政治に参加する人、という意味が含まれていた。**
- **市民には、専門家に対する素人(アマチュア)という意味も含まれている。(小玉重夫『学力幻想』2013年、ちくま新書)**

## 不確実な問題、わからない問題(the issue of uncertainty and ignorance)についての判断と意思決定

- \* 例えば東日本大震災による原子力発電所事故後の放射線のリスク評価とリスク管理をめぐる問題のように、リスクコミュニケーションの分野などでは、専門家間でも確実な解はない、不確実、不明な問題への市民の意思決定が重要視されている(吉川肇子2012「リスク・コミュニケーションのあり方」『科学』82巻1号、岩波書店)。つまり、科学的合理性でのみ解決し得ない不確実な問題が存在し、そうであればあるほど、専門家の科学的合理性のみに依存し得ない、市民的・政治的な判断の余地が高くなっていく。そうした、いわば科学と政治のインターフェイス(小玉重夫 2012「市民科学と放射線教育」『科学』82巻10号、岩波書店)において、専門家と市民が政治的判断と意思決定をいかにして協働して行うのか、その方法論を確立していくこと。

## 無知な市民

無知な市民とは、自分になるべき良き市民像が何であるかについて無知であるような人のことである。無知な市民は、ある意味において、良き市民についての知識を拒絶し、社会に適応することを拒絶し、既定の市民的アイデンティティに縛られることを拒絶する。しかしこのことは、無知な市民が単なる「逸脱者」であることを意味しない。・・・(中略)・・・市民としての学びは、知識やスキル、能力や態度の獲得をめざすのではなく、民主主義の実験に絶えずさらされ(exposure)、関与することをめざすからである。(Gert Biesta 2011 “The Ignorant Citizen: Mouffe, Rancière, and the Subject of Democratic Education”, *Studies in Philosophy and Education*, March 2011, Volume 30, Issue 2:152)

## 学力の市民化

\* 「「有能な者たち」のための教育は、特定の専門家による独占へと閉ざされている教育である。そこでは、知ることと習熟すること、知ることとできることを結びつけようとする。これに対して、「無能な者たち」のための教育は、誰にでも開かれている教育である。そこでは、知ることと考えることを結びつけ、それによって知の独占性を開放しようとする。たとえば、医者にならなくても医療問題を考えること、大工にならなくても建築問題を考えること、プロのサッカー選手にならなくてもサッカーについて考え批評すること、そして官僚にならなくても行政について考え批評すること。つまり、職業と結びついた専門的知識や技能を、市民化された批評的知識へと組みかえていくこと。」(『学力幻想』157-158頁)→アマチュアリズムと政治参加を学力のコアにおく



## 「あまちゃん」にみる アマチュアリズム

今年度の上半期に放映されたNHKの連続テレビ小説「あまちゃん」(宮藤官九郎作)は、学校でいじめられ、引きこもっていた東京の高校生(天野アキ)が、母親の実家がある岩手県の北三陸地方につれられていき、そこで地元の町おこしに目覚める。その後、東京の芸能プロダクションでもまれ、東日本大震災を経て、アキは、親友や先輩、家族、地元の人たちと共に、津波で流された「あまカフェ」の再建に立ち上がり、海女として、そして地元アイドルとして活躍していく。

アキ:芸能界さいると、っていうか東京がそうなのかな、成長しねえと怠けてるみてえに言われるべ。でもな「成長しなきゃ駄目なのか」って思うんだ。人間だもの、ほっといても成長するべ。・・・それでも変わらねえ、変わりたくない部分もあると思うんだ。あまちゃんだって言われるかもしれないねえけど、それでもいい。・・・うん、プロちゃんにはなれねえし。なりだぐねえ。(「あまちゃん」第147回、2013年9月18日放映より)。

## ハンナ・アレント(Hannah Arendt, 1906-1975)

戦前にユダヤ人としてナチス・ドイツから迫害を受け、戦後はアメリカに亡命して活躍した政治思想家。20世紀の全体主義と対決し、それをのりこえる社会のあり方を「公共性」をキーワードとして追求し、その成果は主著『人間の条件』にまとめられている。1961年に、ナチスの元高官アイヒマンに対するイスラエルでの裁判を傍聴し、ユダヤ人を大量虐殺したナチスを批判しつつ、同時に、そうしたナチスの台頭をなぜ許してしまったのかを真摯に問うことなくナチス元高官の弾劾に終始するイスラエル国家をも、批判した。小玉重夫『難民と市民の間で:ハンナ・アレント『人間の条件』を読み直す』(現代書館、2013年10月刊行)





## ハンナ・アレントと「考えること」(映画「ハンナ・アレント」のサイトより)

### 不屈の精神で逆境に立ち向かい、 悪とは何か、愛とは何かを問い続けたアレントの感動の実話

誰からも敬愛される高名な哲学者から一転、世界中から激しいバッシングを浴びた女性がいる。彼女の名はハンナ・アレント、第2次世界大戦中にナチスの強制収容所から脱出し、アメリカへ亡命したドイツ系ユダヤ人。  
1960年代初頭、何百万ものユダヤ人を収容所へ移送したナチス戦犯アドルフ・アイヒマンが、逃亡先で逮捕された。アレントは、イスラエルで行われた歴史的裁判に立ち会い、ザ・ニューヨーカー誌にレポートを発表、その衝撃的な内容に世論は揺れる…。



「考えることで、人間は強くなる」という信念のもと、世間から激しい非難を浴びて思い悩みながらも、アイヒマンの「悪の凡庸さ」を主張し続けたアレント。歴史にその名を刻み、波乱に満ちた人生を実話に基づいて映画化、半世紀を超えてアレントが本当に伝えたい「真実」が、今明かされる。

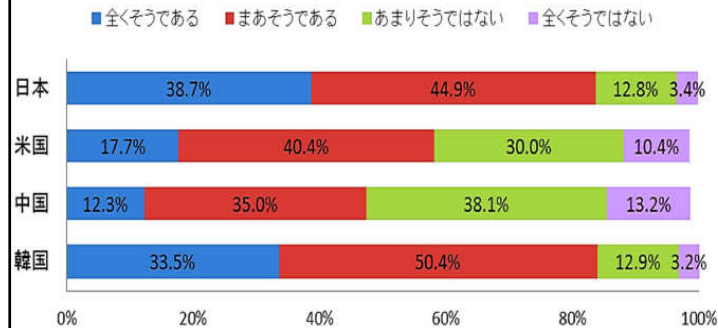
## 大学入試改革論議の動向

政府の教育再生実行会議は11日、大学入試のあり方などについて議論し、高校段階で身につけるべき基礎的な学力を試す「到達度テスト」を新たに導入することで一致し、大学入試との関係について、さらに議論することになりました。

会議では、大学への入学者の選抜にあたっては、学力以外の能力や意欲、適性なども評価すべきとの考えのもと、新しい試験制度について議論しました。その中で、高校段階で身につけるべき基礎的な学力を試すため、「到達度テスト」を新たに導入することで一致しました。(2013年10月11日 TBSニュースより)

### 諸外国の高校生の進路意識

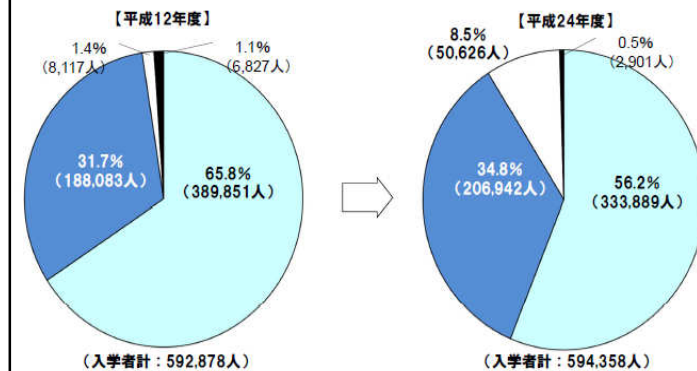
#### 進路について考える時の気持ち (普通科) 「将来自分がどうなるか不安になる」



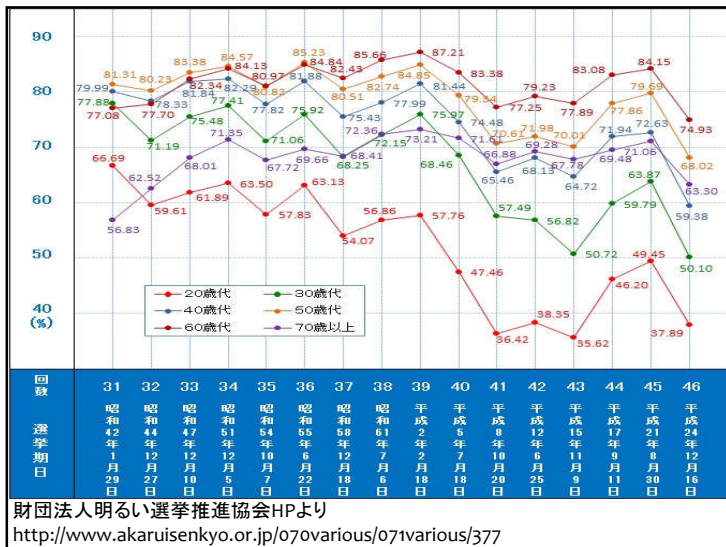
(出典) (財)一ツ橋文芸教育振興会、(財)日本青少年研究所「高校生の進路と職業意識に関する調査報告書(2013年3月)」4

### 平成24年度入学者選抜実施状況の概要 (平成12年度との比較)

平成12年度(AO入試調査開始年度)に比べて、AO入試、推薦入試を経由した入学者が大きく増加しており、入試方法の多様化が進んでいる。



(注)「その他」: 専門高校・総合学科卒業生入試、社会人入試、帰国子女・中国引揚者等子女入試など  
文部科学省大学入試課 19



## 「世界的視野をもった市民的エリート」

\* このシステムの大きな特色の一つは、入学前の**ギャップターム**の存在である。ギャップタームにおいて、先端の研究や社会との接点を持つ多様な体験を通じ、大学で学ぶ目的意識を明確化し、動機付けを行うこと(併せて、偏差値重視の価値観をリセットし、教わる姿勢から学ぶ姿勢に転換すること)、さらに、入学後の海外留学等に挑戦する素地をつくることは、大きな意義を持つと考えられる。こうした意義は、多くの高等学校卒業生にとって普遍性を持つものであり、また、**レイト・スペシャライゼーション**とともに**アーリー・エクスプロージャー**を重視する本学の教育理念とも合致するものである。(「将来の入学時期の在り方についてーよりグローバルに、よりタフにー」(報告) 2012年4月発行、東京大学『学内広報』特集版 21頁)

## 総務省「常時啓発事業のあり方等研究会」 最終報告書(2011. 12.)

\* 社会に参加し、自ら考え、自ら判断する主権者を目指して～新たなステージ「主権者教育」へ 2011年12月 常時啓発事業のあり方等研究会(総務省)  
[http://www.soumu.go.jp/main\\_sosiki/kenkyu/keihatsu/index.html](http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/kenkyu/keihatsu/index.html)

\* 「政府は、「新しい公共」の推進に取り組んでいるところである。「新しい公共」とは、市民、企業、政府等がそれぞれの役割をもって当事者として参加、協働し、支え合いと活気のある社会をつくることである。そのためには、何よりもそれを担い得る市民を育てることが重要である。これからの常時啓発は、まさにそうした市民を育てること、言葉を変えて言えばシティズンシップ教育の一翼を担うものでなければならない。」(p.7) 若者の政治的無関心への対応

別添1

### 社会に参加し、自ら考え、自ら判断する主権者を目指して ～新たなステージ「主権者教育」へ～

<現代に求められる新しい主権者像>

国や社会の問題を自分の問題として捉え、自ら考え、自ら判断し、行動していく主権者

キーワード

①社会参加の促進 …………… 社会参加意欲が低い中では政治意識の高揚は望めない  
 ②政治的リテラシーの向上 …… 情報を収集し、的確に読み解き、考察し、判断する訓練が必要(政治的判断能力)

<これからの常時啓発>

シティズンシップ教育の一翼を担う新たなステージ「主権者教育」へ

○若者から高齢者まで、常に学び続ける主権者を育てる

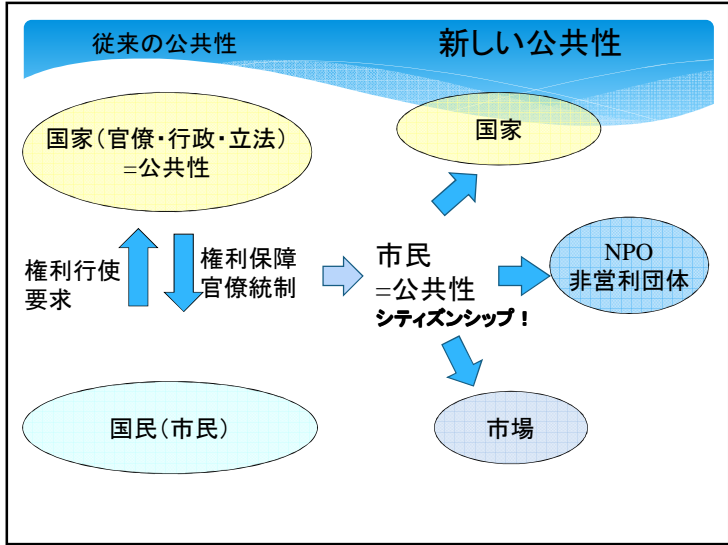
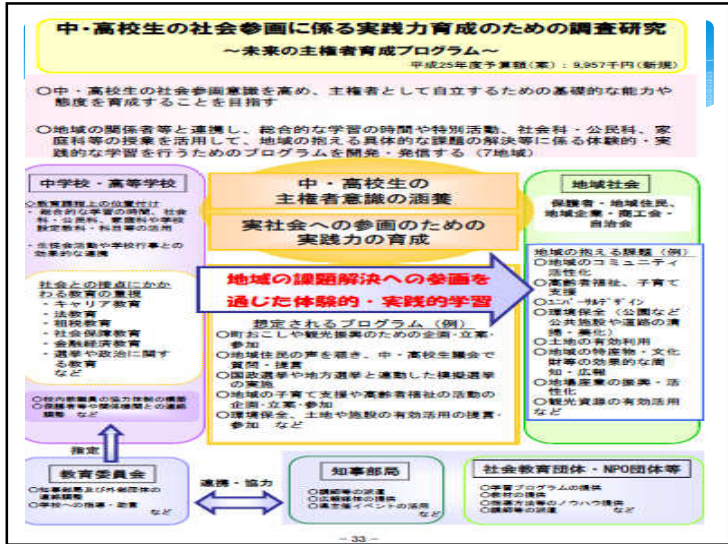
→ シティズンシップ教育の中心をなすのは、市民と政治、社会との関わりを深めること。常日頃から政治や社会の問題を考え、学習、体験を積み重ねることによってはじめて質の高い投票行動に結びつく。

→ 社会の諸活動に参加し体験することで、社会の一員としての自覚を促し、その中で、数多くの政治的・社会的課題に対して的確に意思決定できる資質を育てる。

○将来を担う子どもたちにも、早い段階から、社会の一員、主権者という自覚を持たせる

→ 子どもたちの政治意識の醸成は各国の共通課題。諸外国の事例も参考に、学校教育と選管、地域が連携し、参加・体験型の学習を充実させることが必要。

→ 最終的には、次期学習指導要領において政治教育をさらに充実させ、学校教育のカリキュラムにしっかりと政治教育を位置づけることが必要。



### シティズンシップ教育の政策化

2003年3月20日：新しい「公共」を創造し、21世紀の国家・社会の形成に主体的に参画する日本人の育成(中央教育審議会「新しい時代にふさわしい教育基本法と教育振興基本計画の在り方について」)→現行教育基本法2条3号「公共の精神」につながる

- 2010年1月26日：「新しい公共」円卓会議＝「新しい公共」とは、人を支えるという役割を、「官」と言われる人たちだけが担うのではなく、教育や子育て、街づくり、防犯や防災、医療や福祉などに地域でかかわっておられる方々一人ひとりにも参加していただき、それを社会全体として応援しようという新しい価値観です。(第173回国会における所信表明演説)
- 政府レベルではじめて、「シティズンシップ教育の推進」を唱える動きが活発化し、その中で「政治的教養」が中心に位置づけられている(2010年7月内閣府「子ども・若者ビジョン」)。
- 2012年12月に成立した自公政権では、「公共心」の教育や新科目「公共」の設置が議論されている。



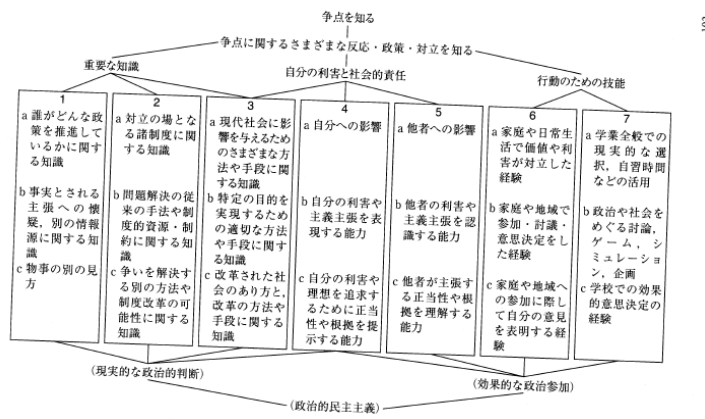
### 3 カリキュラムの提案へ向けて

## シティズンシップ教育をカリキュラム化する二つの方向

- \* 1 領域化(教科化)する
  - (1) 総合、道徳、特活を軸に(品川型)
  - (2) 社会科(お茶大附属「市民」)を軸に
- \* 2 領域横断的に
  - 神奈川県「シチズンシップ」教育 神奈川県政治参加教育「総合的な学習の時間」と「政治経済」各教科のネットワーク化
  - 文科省の今年度概算要求案(前掲)
- \* 3 上記の1と2をクロスさせつつ、「政治的リテラシー」(アマチュアリズムと政治参加の両方の契機を含む)を、コアカリキュラムの中心におく、という提案をしたい。

政治的リテラシーの構造 Crick, B., 2000. *Essays on Citizenship, continuum* (=2011 関口正司監訳『シティズンシップ教育論』法政大学出版局)

図 4-1 政治リテラシーの樹形図



## 論争的課題をいかにして教育するか (クリック・レポート)

- \* 「中立的なチェアマンアプローチ(Neutral Chairman approach)
- \* 「バランスをとるアプローチ」(Balanced approach)
- \* 「明示的に自分の意見を言うアプローチ」(Stated Commitment approach)
- \* この3つのアプローチのいずれか一つに偏してはならず、これらを効果的に組み合わせることによって、論争的課題を扱うことが可能。



